



Data

監督・脚本：ジョン・タトゥーロ
出演：ジョン・タトゥーロ／ウディ・アレン／ヴァネッサ・パラディ／リーヴ・シュレイバー／シャロン・ストーン／ソフィア・ベルガラ／ポプ・バラバン

👁️👁️ みどころ

ウディ・アレンの監督・脚本・出演だけでもユニークで面白いのに、ジョン・タトゥーロのアイデアで脚本が書かれ、本人自ら監督・出演したうえ、ウディ・アレンも共演した本作が、更にユニークで面白いのは当たり前。2人の「才人」が織り成す、ポン引きとジゴロの活躍ぶりは？

セックスも3Pもニューヨークのセレブにはお馴染み(?)だが、そこにユダヤ教のコミュニティが登場するのが本作のミソ。高名なラビの未亡人はめっぽう美人だが、2人のコンビは彼女に対していかなるアプローチを？
そして迎える、何ともおしゃれなラストの展開は・・・？



■□■原題は？邦題は？ジゴロとは？■□■

本作の邦題は『ジゴロ・イン・ニューヨーク』、原題は『Fading Gigolo』だから、そこで共通するのは、ジゴロ=GIGOLO。「Fading」は英和辞典 Weblio辞書を調べると、(徐々に)見えなくなる、消えていく、という意味だから、原題はさしずめ、「消えていくジゴロ」。しかして、ジゴロとは？

日本語俗語辞書を調べると、ジゴロとは「女性の収入で生活している男性のこと」で、フランス語の“gigolo”からきた言葉。本来、フランス語では「(年上の女性に養ってもらっている)若いつばめ」または「(見かけ倒しの)優男(小学館・仏和大辞典より)」という意味だが、日本でジゴロといった場合、年齢に関係なく、女性にたかったり、女性に養われる(男妾)など女性の収入をあてにして生活している男性のことをいう、とある。他方、Wikipediaを調べると、「ジゴロ(仏: gigolo)とは、女から金を得

て生きている男（女から金を巻き上げて生活する男、女にたかって生活する男、女から巧みに援助を得る男など）のことをいう。ヒモ、男妾など、また男娼、『つばめ』、『スケコマシ』などが類義語に当たる」、とある。

たしかに、「ジゴロ」とはそんな意味の外來（日本）語として定着しているが、ウディ・アレンが俳優として出演した、そんなタイトルの本作は一体何の映画？

■ジゴロは色男でなければ！いやいや、必ずしも・・・■

ジゴロの条件はナニ？それは「億の金を貢がせた男」としてマスコミに紹介され、さらに日活の『実録色事師 ザ・ジゴロ』（82年）で映画化され、さらにTBSの『日本一』という番組で、「ジゴロの日本一」として出演した、元新宿のホストクラブ「愛」のナンパワン・ホストだった伏見直樹の例を見てもわかるとおり、第1条件は色男であること。ところが、本作を監督、脚本し、自らフィオラヴァンテ役で出演したジョン・タトゥーロをみれば、必ずしもその条件を満たさなくてもジゴロになれそうだ。

フィオラヴァンテは、3代目にして代々続いた本屋をつぶしてしまったウディ・アレン演ずるマレーの友人。マレーが自分の商才の無さを棚に上げて、「希少な本を買う人が、今では希少になった」と勝手なことを言うタイプなら、フィオラヴァンテもいい中年のくせに定職にも就かず、数日前から花屋のバイトを始めた男。フィオラヴァンテは収入なし学歴なしのうえ、イケメンでもないから、ジゴロには全く不向き。誰でもそう思うところだが、身長だけはあるフィオラヴァンテはマレーの目から見ればジゴロに向いているらしい。

もっとも、ジゴロ＝色男というお約束を完全に無視した本作を生み出したのはジョン・タトゥーロその人だから、何とも手前勝手な話だが、そんなジゴロネタにすっかり心を奪われたのが、監督・脚本・俳優をこなす才人ウディ・アレン。しかして、ポン引きのマレーとジゴロのフィオラヴァンテという、何とも奇妙な男同士コンビが誕生したからいやはや・・・なるほど、ジゴロは、必ずしも色男でなくても・・・。

■ヴァージル&ボンゴは、「やすきよ」以上の名コンビ！■

漫才界では、花菱アチャコ・横山エンタツのコンビや、「やすきよ」こと横山やすし・西川きよしのコンビなど、さまざまな名コンビが生まれている。また、勝新太郎と田宮二郎の『悪名』シリーズのコンビも絶妙だった。しかして、マレーが通う行きつけの皮膚科の女医パーカー（シャロン・ストーン）からの「私とレズビアンとのパートナーとのプレイに男を入れたいの」という大胆な相談に「一人いるけど、1000ドルかかるよ」と回答したことから生まれた、マレーとフィオラヴァンテのポン引き・ジゴロのコンビは、それに勝るとも劣らない名コンビだ。

『氷の微笑』（92年）で何とも妖艶な姿を魅せてくれたシャロン・ストーンが、約20年後の今でも、色気タップリにジゴロのフィオラヴァンテに迫ってくる姿は見モノ。豪華

なマンションに1人住むパーカーが、「まずは、お試しさせて。私と彼の二人で」とやってみた「お試し」は上々だったらしい。ジゴロとして何よりも必要な「雄の男」としての能力、つまりセックス能力は地位や名誉、金は全く関係なく、身長が高く筋肉質のフィオーヴァンテのような男に宿っているらしい。このお試し価格は約束どおり1000ドルだったが、それにチップが500ドルも加わったから、その分配はいいか？

他方、ウディ・アレンの俳優としての能力は、軽快なフットワークと絶妙な営業トークが要求されるポン引き役にピッタリ。フィオーヴァンテが本作で魅せる、女性の気持ちを理解できるというジゴロとしての隠れた才能と、マレーのもとと備わっていたかのようなポン引きの才能が合わされば、向かうところ敵無しだ。もっとも、真面目なフィオーヴァンテは時々「金をもらってセックス奉仕をする男娼役」に抵抗感と罪悪感を覚えるらしいが、そこはマレーの「君のやっていることは女性の自尊心を持ち上げる“善行”だ」という励ましによって、クリア。そんな風に万事に気が合う2人は、自分たちのコンビに「ヴァージル&ボンゴ」というコンビ名までも・・・。



© 2013 Zuzu Licensing, LLC. All rights reserved

■□■ニューヨークにみるユダヤ教のコミュニティとは？■□■

ニューヨークの高級マンションに住むリッチな女医パーカーはいかにもアメリカ的な女性で、レズビアンにも3Pにも積極的だが、本作のもう一人のヒロイン、アヴィガル（ヴァネッサ・パラディ）は、それとは正反対。アヴィガルは厳格なユダヤ教宗派の高名なラ

ピの未亡人という設定だが、ニューヨークの中に正当派ユダヤ教のコミュニティーがあることを本作ではじめて発見！ユダヤ教では、女性は男性に髪を見せてはいけないため、かつてのドリス・デイのようなアヴィガルの短髪はかつららしい。また未亡人がその素肌を男に見せるのは厳禁なのも当然だ。

ところが、夫の死後ずっと喪に服している姿を見たマレーから、「人は触れ合いが必要だ」と説得され、フィオラヴァンテの「セラピー」を受けてみると、これが最高！やはり、大人の男たちが創る映画のそこらあたりの魅力は最高だ。若い女目当ての欲望をギラつかせた男では決して見せることのできない魅力を、ジゴロのフィオラヴァンテが等身大に（？）見せつけてくれる。そして、実年齢80歳直前のウディ・アレン演じるマレーが、何とも軽快なセールストークでそんな世界を実現させている。

■□■ユダヤ教での裁判は？裁くラビたちは？■□■

そんなアヴィガルの行動に、陰ながらずっと彼女に想いを寄せていたユダヤ教地域パトロールの男ドヴィ（リーヴ・シュレイバー）が大いに不満なのは当然。そこでドヴィはアヴィガルに対して直接その想いをぶちまけた他、あまり真面目なユダヤ教徒ではなく、高田純次ばりの「テキトー男」・マレーを拉致・監禁し（？）、ユダヤ教による審議会（裁判？）にかけることに。ドヴィの告発を受けてマレーを裁くのは、日本のような裁判官でもなければ裁判員でもなく、ユダヤ教のラビたち。もし有罪になれば、マレーの「ポン引きの刑」は「石打ちの刑」に相当するらしいから大変だ。

マレーの友人である弁護士ソル（ボブ・パラバン）が急遽駆けつけてきてくれたのは頼もしい限りだが、さてハリウッド映画では珍しい、こんな法廷の行方は？

■□■報酬の配分は妥当？それとも・・・？■□■

当初、パーカーに対する1000ドルのお試し価格での挑戦の結果、500ドルのチップまで獲得したマレーとフィオラヴァンテの取り分は、話し合いの結果スナリ4：6と決まった。しかし、その後の「ヴァーヂル&ボンゴ」コンビの売れっ子ぶりをみれば、この取り分ではフィオラヴァンテが少しかわいそう。だって、仕事が入れば生身の肉体を使って肉体労働に精を出すのは、もっぱらフィオラヴァンテなのだから。マレーの4割の取り分は吉本興業の「搾取」ぶりには及ばないが、やはり少し取りすぎだろう。

さらに、セックスにおいて女はいかようにも対応できるが、男はメンタル面が微妙だから、種馬並みの馬力、精力を誇るフィオラヴァンテをもってしても、「お金のため」という考えが頭をもたげると、ダメになることがあるらしい。しかして、いよいよパーカーの親友セリマ（ソフィア・ベルガラ）を迎えての、晴れの3Pの舞台で、フィオラヴァンテがみせてしまった失態とは・・・？

これは「金のため」という不純な意識の他、どうもフィオラヴァンテが未亡人アヴィガ

ルに恋してしまったためでは、と思われる面もあるが、ここらあたりのアヴィガルの絶妙な気持ちを含む心理ゲームは、ジョン・タトゥーロ監督の脚本をじっくりと楽しみたい。

■□■こんなコンビも、いつかは終わりを・・・？■□■

やすきよのコンビは、96年の横浜やすしの死亡によって終わりを告げたが、それまでも風雲児のやすしのさまざまな事件によって何度かのコンビ解消の危機を迎えた。しかし、そこはきよしの我慢強さもあって、その都度コンビが復活してきたが、本作ラストのシークエンスを見ると、いよいよヴァージル&ボンゴのコンビは解消されるらしい。

たしかに、一方ではこれまでの成功物語を、他方ではマレーのユダヤ教裁判の危機を見ていると、「ここらが潮時」かも。フィオラヴァンテの提案を聞き、マレーも1度はそう考えたようだが、ラストにみるフレンチピストロのシークエンスを見ていると、さすがジョン・タトゥーロ監督の脚本は一筋縄ではいかないから面白い。

さて、カウンターに一人座り、カクテルを飲んでいた女性との間で偶然展開された会話から偶然生まれてきた、ヴァージル&ボンゴの更なる方向性とは・・・？

2014（平成26）年5月29日記

NYを舞台にした映画は何本？

1) 去る6月17日に発表された「世界の住みやすい都市ランキング」によると、1位はデンマークのコペンハーゲン。2位に東京、9位に京都、10位に福岡など日本は大健闘だが、アメリカは23位にポートランドがあるだけ。パリは18位に入っているが、なぜかNYもロンドンも圏外だ。

2) しかし、NYを舞台にした映画は多い。ネットで調べてみると、294件もヒットしたからビックリ！『シネマ33』に収録した『ジゴロ・イン・NY』（13年）や『マダム・イン・NY』（12年）と同じようなタイトルに『ラブ・IN・NY』（82年）、『フルムーン・イン・NY』（89年）、『オータム・イン・NY』（00年）、『サイドウォーク・オブ・NY』（01年）、『キング・オブ・

NY』（02年）、『ギャング・オブ・NY』（02年）、『猟奇的な彼女 in NY』（07年）等がある。

3) 他方、「あなたのお気に入りのNY映画は？」のトップは、最近の『セックス・アンド・ザ・シティ』（08年）だが、『ティファニーで朝食を』（61年）のような懐かしい名作や、ラブコメの女王メグ・ライアン主演の『めぐり逢えたら』（93年）、『ユー・ガット・メール』（98年）、『ニューヨークの恋人』（01年）が3本も入っているのは嬉しい。

4) 私の独断と偏見でベスト3を選べば、①『ウエスト・サイド物語』（61年）、②『ウォール街』（87年）、③『アメリカン・ギャングスター』（07年）だが、さて、あなたのベスト3は？

2014（平成26）年10月31日記